

笹川保健財団 奨学金支援

2022年 3月 7日

公益財団法人 笹川保健財団
会長 喜多悦子 殿

2021年度奨学金支援
完了報告書

標記について、下記の通り完了報告書を添付し提出いたします。

記

進学先 Anglia Ruskin University

氏名 永谷温幸

Anglia Ruskin University
Faculty of Health, Education, Medicine and Social Care
PhD candidate 永谷温幸

1. 修学内容と経過

今回の奨学金支援の対象期間(2021年6月～2022年2月)は、PhD candidate1年目に該当するが、それ以前の修学内容と経過も含めて報告する。イギリスでは、一般に修士課程の修了者は博士課程に進学ができる。博士課程では Master of Philosophy (MPhil) の学位を取得後、PhD candidate に進級することが主流である。

2019年4月～2020年3月 (PhD student 1年目)

PhD student 1年目では、研究計画書の提出および文献レビューを行なった。指導教員による指導のもと研究計画書は受理され、研究を実施する上で必要となる倫理審査も通過した。また、必修講義(Stage1: Introduction, Stage2A: Effective presentations, Stage2B: Academic writing) Sage1 では博士課程を履修する学生に求められる研究知識について、Stage2A では場面に応じた発表方法について、Stage 2B では自分の意見や思考を確実に伝える文章の書き方について学んだ。このほか、選択科目については指導教員の助言のもと必要に応じて履修した。

2020年4月～2021年3月 (PhD student 2年目)

PhD student 2年目では、過去1年の研究の進捗状況を報告する Annual review と呼ばれる審査、PhD candidate となるための進級審査があった。倫理審査に通過後に研究対象者が所属する保健医療施設へ研究協力の依頼を開始した。しかし、COVID-19の影響により研究に協力いただける保健医療施設が十分に集まらなかったことに加えて対面でのインタビューも制限された。そのため、研究参加者への募集方法及びインタビュー方法を変更するため再度、倫理審査を受けることとなった。その後、研究参加者とインタビュー日時を調整しながらデータ収集及び分析を進めた。

2021年4月～2022年3月 (PhD candidate 1年目)

PhD candidate 1年目は、主にデータ収集と博士論文の執筆の時期となる。私の場合は、倫理審査を繰り返したものの研究の着手が予定より早かったこともありデータ収集はすでに終えていたため、博士論文の執筆に専念した。また、必修講義 (Stage3: Thesis production & examination preparation) では、博士論文の提出と口頭試験への取り組み方について学んだ。12月には第41回日本看護科学学会学術集会にて口頭発表を行なった。

予定：2022年4月～2023年3月 (PhD candidate 2年目)

PhD candidate 2年目は、博士論文執筆に専念する年となる。私の場合は、指導教員の勧めもあり博士論文の執筆に加えジャーナルへの論文投稿の準備を進める予定である。

2. 研究概要

研究課題

Exploring the experiences of Indonesian, Filipino and Vietnamese registered nurses when relocating to Japan under the Economic Partnership Agreement (EPA): constructivist grounded theory

研究背景

近年の日本における医療体制として、病院中心の治療から地域を基盤とした個々の生活に目を向けた包括的支援を含む保健医療体制への転換が進んでおり、これらの変化に対応するために各関連機関による専門職者の育成および労働環境の改善に力が注がれている。医療従事者の労働環境の一般的な改善も引続き必要であるが、特定の労働者を対象に応じた改善策も必要であると考えられる。経済連携協定(EPA)の一環として、インドネシア、フィリピンおよびベトナムより看護師および介護福祉士の候補者を 2008 年より受け入れてきた。しかしながら、資格取得後に看護師あるいは介護福祉士として就職できたにも関わらず、離職してしまう者は少なくない。EPA 看護師候補生を対象とした先行研究はこれまでに多くあるものの、日本で就業する外国人看護師を対象とした研究は依然として少ない。そこで日本における EPA 看護師の経験を明らかにすることを研究目的とし、研究結果をもとに今後の医療従事者の労働環境の改善や外国人移住者に対する政策改善についての提言ができることが期待できる。

研究方法と結果

Constructivist grounded theory を研究方法論として位置付け研究を進めた。インタビューは、対面を予定していたが COVID-19 の発生に伴いオンラインでの選択肢を追加し研究参加者に選んでもらう形とした。インタビュー言語は日本語とし、時間は 60～90 分とした。インタビューが終了する度にインタビュー内容を英語に翻訳し指導教員の指導のもと、次回のインタビューに繋がる質問内容を検討した。インタビュー期間は 2019 年 2 月～2020 年 8 月となり、合計 20 名の EPA 看護師（インドネシア、フィリピン、ベトナム）が本研究に参加した。メインカテゴリーは言語、文化、人間関係、個人の環境変化が抽出された。EPA 看護師はこれらのカテゴリーに関する課題に直面しており、EPA 看護師候補生を対象にした研究では言語や文化に関する課題はすでに指摘されていた。EPA 看護師となってもその課題は引き続き乗り越えなければならず、言語に関してはより高度な言語能力が問われことになる。言語、文化は人間関係に影響を及ぼす因子となり、結果的に個人の環境変化の課題に直面したときに看護職を辞めてしまう、あるいは日本での暮らしを諦めてしまうことに繋がるということが明らかとなった。これらの課題を解決するためには、EPA 看護師当事者だけに求める対応策ではなく、受け入れ機関及び地域における対応策が必要となる。

今後の研究課題

本研究では EPA 看護師のみを対象とした質的研究である。多角的に社会的現象を把握するためには EPA 看護師に関わる者を対象とした研究も必要である。また、本研究で得られた成果をもとに量的研究を実施することでより実証的な結果を導き出すことが期待される。

3. これまでの学びを今後どのように研究や仕事に生かしたいか

更なる研究を継続するために博士課程修了後も大学等の研究機関において引き続き研究を行うことを考えている。修学中に本研究で得られた成果をジャーナルへの論文投稿ができなかった原稿がある場合については、博士課程修了後も引き続きその作業を予定する。博士課程での一番の学びは今後行う研究の基礎を築くことができたことである。研究に関する知識を継続的に深めることも大切であるが、そのためには研究ができる職場で就職できることを期待したい。

最後になりますが、奨学金支援をいただきましたこと心よりお礼申し上げます。